



## 上智大学ヨーロッパ研究所主催講演会 概要

テーマ： 「ジェンダーの観点から読む世界文学」 男たちが描いてきた女性像  
講師： 沼野 充義（名古屋外国語大学副学長）  
司会： 出口 真紀子（上智大学外国語学部英語学科教授）  
日時： 2020年11月26日（木曜日）17：20-19：00

本講演は外国語学部英語学科「立場の心理学 — マジョリティーの特権を考える」の公開授業形式で行われた。沼野先生にはロシア男性作家が描く女性像を中心に、「立場の心理学」やご自身のご研究分野の一つである「アダプテーション理論」の観点と結び付けながらお話いただいた。

1. まず、文学の他ジャンルへのアダプテーションが行われている（映画化、バレエ化等）トルストイの「戦争と平和」が取り上げられた。

- 男性中心主義であるトルストイにとって、女性は描かれる対象、欲望の対象であり、主体ではなく、バイアスのかかった存在。
- 主人公ナターシャはロシア文学最大のヒロイン。リアリズム作家であるトルストイは作中ナターシャの二つのダンス（民衆的なロシアの精神を体現するような踊りと、ロシア貴族の華やかな社交界におけるアンドレイ・ボルコンスキー侯爵との華麗なダンス）を対照的に描く。

*“渡り者のフランス女に育てられたこの伯爵のお嬢さんがどこでどうゆうふうにしていつ自分が呼吸しているロシアの大気の中からこんな雰囲気をも自分の中に吸い込んだんだろうか。とっくの昔にフランスのパドシャールに駆逐されてしまったはずのこんなステップを彼女はどこで覚えてきたんだろう。ともかく雰囲気もステップも真似や習い覚えたものではない。まさにおじさんが彼女に期待してたロシアのものだった”。*

これはトルストイが願ひ、託すロシアの女性像。ロシア文化史、ロシア音楽史の核心。

- エピローグではナターシャを“多産な雌”と描写するが、これは女性蔑視ではなく、女性への繊細かつ深い愛と読むことができる。

2. アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン（1799-1837）の「エヴゲニー・オネーギン」について、

- 恋多き男プーシキンの父方の先祖はアフリカ系である。ロシア最大の詩人がアフリカの血を引いている、つまりロシア文学の多国籍性多文化性を示す。
- 「エヴゲニー・オネーギン」は女（タチャーナ）が男（オネーギン）に振られ、男が女に振ら、というすれ違いが繰り返されて円環が閉じられ、作品のプロットは永遠に完結しない。
- オネーギンが「余計者」というアンチ・ヒーロー、タチャーナが強くひたむきに生きていけなげなヒロイン。これはロシア文学の永遠のプロトタイプであり、その後のロシア文学における男性像女性像に少なからず影響を与えた。

- 田舎貴族の娘タチャーナが、オネーギンに女性主体の強い意思表示する場面が描かれている。  
(革命的)

### 3. トルストイの「アンナ・カレニナ」

- 女性ヒロインに一貫して焦点を当てた不倫小説。西欧文学において婚姻外の愛は西洋近代の恋愛観の源流。ロシア貴族社会における不倫の社会的制裁をすべて背負い込むアンナは鉄道自殺に追い込まれる。
- トルストイは創作過程で、アンナを軽薄で醜い罰せられるべき存在から、より魅力的な、美貌であるだけでなく、精神的にもより深みのある女性に変貌させている。
- 一方、夫カレニンは当初高潔な人間に描かれていたが、最後にはいやらしく、冷酷で、世間体ばかりを考える打算的な、愛を感じられない人間に変貌。
- 巻頭エピグラフの「復讐するは我にあり」は、作者トルストイの意思に反して成長し魅力を持ち始めたアンナに“復讐”するのは、神のみであって、トルストイではないとする、トルストイのアンナへの共感と読み取ることもできる。
- 村上春樹は短編小説「かえるくん、東京を救う」「ねむり」の中で「アンナ・カレニナ」を登場させている。
- 「アンナ・カレニナ」はグレッタ・ガルボ（1935）、ヴィヴィアン・リー（1946）、ジャクリーン・ビセット、ソフィー・マルソー（1997）、タチヤーナ・サモイロワ（1967）、キーラ・ナイト（2012）らによって数多く映画化。バレエも上演されている。

### 4. チェーホフ「小犬を連れて奥さん」

- 「エウゲニー・オネーギン」（1825-1832）、「アンナ・カレニナ」（1873-1877）、「小犬を連れて奥さん」（1899）は男の立場から描いた女性像においてつながっている。
- 成就しない愛を演じた男女。プーシキンの時代、不倫は社会的に許されない、心を強く持ち、道を踏み外さない時代。
- アンナの時代は女性が情熱を自ら燃やし、禁断の不倫の道に踏み込んで行く。同時に貴族社会において女性の身の破滅を意味し、幸福を手に入れることはできなかった。
- チェーホフの時代、不倫が成就する可能性は高まる。主人公はこれからどうしたらよいのだろうか、と悩んで終わる。結論は読者に委ねる。

### 5. ロシア以外の男性作家が描く女性像

- ミラン・クンデラ（1929-、チェコ生まれ、フランス在）「存在の耐えられない軽さ」：人間はみな同じようなものだ。人間には100万分の一の違いがある。その違いが重要なんだ。女も然り。
- 村上春樹（1949-）はセックスシーンの多い作家。女性の描き方に特徴。
- 日本は男尊女卑と言われるが、世界に誇る文学の最高峰は源氏物語（紫式部）、美術界においては草間弥生。芸術界の世界におけるトップは女性。

ジェンダーとは何か？という質問に、沼野先生からは、Gender はもともと日本語にはない文法的概念。日本で人間の性別についてはセックスという表現もあるが、ジェンダーという概念は歴史的社会的に構築されてきており、文学作品の中でジェンダーを考えることができる、とのお応えだった。

この記録は、講演会当日の録画データに基づき内容をまとめたものであり、記された内容は報告者の発言内容とは細部で異なる場合がございます。なお、本講演会で表明された見解は全て個人的なもので、必ずしも上智大学や当研究所を代表する見解ではありませんので、ご理解・ご了承下さいますようお願いいたします。